

# 智徳の模範

慶應義塾の第一の學塾として  
自ら百人を以て其目的我々國中  
に於ける其品の源泉智徳の模範たるんことを  
期し之を實踐するに居る者我々其國の  
名譽を明くするに之を以て其の模範たるんことを  
實踐し其社會の先導者たるんことを期す  
ものなり  
福澤諭吉

「慶應義塾の目的」  
慶應義塾は単に一所の學塾として自から  
甘んずるを得ず。其目的は我々日本國中に  
於ける其品の源泉、智徳の模範たるんこ  
とを期し、之を實際にしては居家、処世、  
立國の本旨を明にして、之を口に言ふの  
みにあらず、躬行實踐以て其社會の先導  
者たるんことを欲するものなり。

福澤諭吉

今、社会は大きな変動期を迎えています。昨年の東日本大震災は、多くの地域に未曾有の被害を与え、また福島の原子力発電所の事故もあり、今も多くの人々が住みなれた土地に帰ることができない状態が続いています。「想定外」の地震と津波と事故、という言葉とともに、私たちの社会のもろさが露呈され、科学技術至上主義への不信が高まっています。また、地球環境問題やヨーロッパをはじめとする各国の財政危機問題など、国境を超えてグローバルに対処すべき問題も山積みとなっており、これらの問題は一つの学問領域では解決しえない複雑さを含んでいます。まさに日本も世界も大きな転換期に差しかかっています。

この大きな変化に対し、今自分に何ができるのかを問うとき、「慶應義塾の目的」の中にある「智徳の模範」についてあらためて考えてみてほしいと思います。「智」とは物事を認識し判断できる能力であり、「徳」とは自分勝手ではなく、相手を思いやる心や品性のことです。この「智徳の模範」と評されるまで自らを高めていくには、福澤先生の言われた、実証的な科学という意味の「実学」を真摯に学び続けることが必要ではないでしょうか。またこのような「智徳の模範」となる人材を育て、社会に貢献すること、それが慶應義塾に課せられた使命です。

本特集では、「留学」「卒業研究」「就職」「通信教育（生涯学習）」のシーンから、学びや智徳について、塾生の取り組みや義塾の姿勢・考え方を紹介していきたいと思えます。



# パリ政治学院とのダブルディグリー・プログラム始まる!

経済学部は義塾の学部として初めてダブルディグリー・プログラム協定を締結し、今夏一期生として5名の塾生をパリ政治学院 (Sciences Po「シアンスポ」)へ派遣しました。プログラムでは義塾とシアンスポそれぞれで専門性と教養を深め、最短4年間で双方の学位を取得することが可能です。渡仏を間近に控えた7月、派遣生の一人に話を聞きました。

——プログラムを知ったきっかけは？

塾高3年の秋、フェンシングの夏季インターハイも終わって新しく取り組める「何か」を探していました。そんなとき、学部の説明会でプログラムを知り、「ぜひ参加したい!」と強く希望するようになりました。

外国暮らしや留学の経験はなく、特に語学に秀でているわけではありませんでした。しかし、プログラムを知ってから一念発起して英語の勉強を始めました。同時に学問や知識への欲求に一気に火がつき、それまで見向きもしなかったデカルトの哲学書やポーターの経営書など、いろいろな本を読み漁るようになりました。自分の知らない世界が広が



経済学部2年 久太君  
交流入り

っていることに「ゾクゾク」し、大学入

学後も授業などを通じさまざまな分野に触れることで、学ぶことへの興味が一層深まりました。選考では、そうした「もつと知りたい」との思いを伝えました。

——このプログラムの魅力は？

義塾とシアンスポの双方に「入学」し、それぞれでじっくりと学べることです。どちらの学生でもあるというアイデンティティを持てることにも大きな魅力を感じています。アジア・ヨーロッパ研究を専攻するル・アーヴル校には、世界各国から留学生が集まっています。1学年100人以下で、デイスカッションやプレゼンテーションのクラスは約20人と少人数。自分の考えを発言する機会も、目を通す文献の量も多くなります。異なるバックボーンを持つ人と意見を交わせるのは刺激的ですし、欧州という場所でアジアについて学び、自分が属するアジアや日本を客

観視できる意義は大きいと思います。

——今後について教えてください。

再来年(2014年)

9月以降はシアンスポの学生と一緒に義塾へ戻り、三田で専門的な経済学を学びます。将来の目標はまだ模索しているところですが、たくさん刺激を受けながら、心躍るものを追究すれば、それが自分の道につながると信じています。

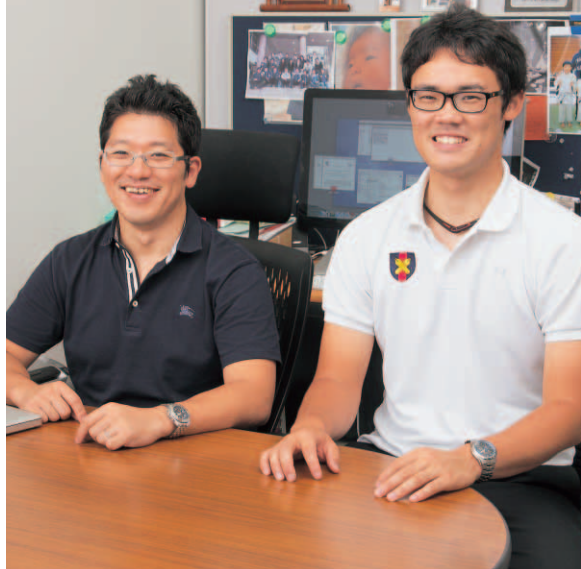
多くの刺激を力にしてほしい



経済学部教授  
プログラマーディネーター  
柏崎千佳子

パリ政治学院とのダブルディグリー・プログラムの目的は、国際的な感覚と教養、経済の専門知識を身につけた次世代のリーダーを育てることです。参加学生は、フランスで2年間を過ごし多様な国の学生と考えや意見をぶつけ合いながら、コミュニケーション能力を高め、人間性を磨きます。一期生は、1年生が3人、2年生が2人です。「得られるものはすべて吸収する」という気概を持って、学んでほしいと願っています。





理工学部電子工学科 准教授 理工学部電子工学科 4年  
あおき よしみつ 青木義満 ふくたに こうじ 福谷浩司君

case 2 卒業研究 あいまいさを定量化する  
サイエンス  
**スポーツを実学する**  
**投球フォームの**  
**画像解析研究**

最速155キロの剛速球を投げる福谷浩司君は野球部のエース。2度の六大学野球優勝に貢献する活躍をみせる一方で、理工学部生として日々の授業や実験に取り組んできました。4年生からは、青木義満研究室に所属し卒業研究を開始。長年プレーしてきた野球を研究対象にした福谷君と指導する青木准教授の話からスポーツと実学に迫ってみます。

**青木** 理工学部には、体育会所属の学生は少ないようですが、義塾入学から入ゼミまでの経緯は？

**福谷** 実は、高校での野球を終えた時、大学で本格的に野球を続ける気はありませんでした。ところが、義塾野球部の練習を見学する機会があり、強いチームなのに明るい雰囲気なのが気に入って、理工学部のAO入試を受験しました。当初は主力選手になって活躍できる自信もなく高校の理科の先生になりたくて、教職をとろうと思っていま

した。しかし、2年生になると試合で投げさせてもらえる機会が増え、秋季リーグでは思いがけずベストナインに選ばれるという栄誉も。そのころから

プロへの道を真剣に意識するようになりました。勉強の方は、野球との両立が大変なことや、理工学の基礎科目や専門科目が理論ばかりで、あまり好きになれない時期もありました。気持ちが変わったのは、3年生の時に青木先生の「電気電子工学実験第2」という実験授業でwebカメラを使ったソフト作

学問の重要性を説き続けた福澤先生。ここではその想いが強く現れたフレーズを「学問のすゝめ」の中からピックアップし紹介します。

学問の必要（初編より）

実語教に、人学ばざれば智なし、智なき者は愚人なりとあり。されば賢人と愚人との別は、学ぶと学ばざるとに由り出来るものなり。

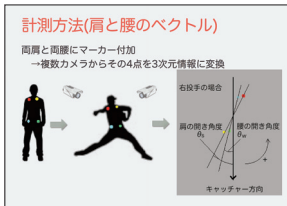
「学問のすゝめ」の冒頭は、有名な「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らずと云えり」から始まります。その後を受けるのが、学問の必要を万人にわかりやすく説いたこの言葉。賢き人、富める人になりたいのなら、何よりも学問をしなければ、という先生の教えは、明治維新後の社会で大きな反響を呼び、「学問のすゝめ」は大ベストセラーとなりました。

『学問のすゝめ』にみる  
**智徳の模範**



『学問のすゝめ』初版  
 (慶應義塾図書館蔵)





います。先生や先輩のアドバイスを受け

りを行ったときです。ものづくりの面白さに目覚め、青木研を希望しました。青木 理工学部の研究室は学部4年から修士の3年間でひとつの研究テーマを追いかけるのが普通ですが、福谷君の場合は1年間という制約がありテーマ選別に悩みました。最終的には、研究の社会的実用性なども考慮して、球の出どころが打者から見づらい投球フォームを画像処理からアプローチする研究に決めました。

**福谷** よくテレビで解説者が「このピッチャーは球の出どころがわかりにくくて打ちづらい」などと言いますが、この打ちづらさは、言葉では言えても、そのフォームは数値化、つまり定量化されていません。体の各部分にマーカーを付けてカメラで撮り、その動きを画像処理技術で定量化するのが卒業研究の目的です。1年間の研究では公表できるまでの成果は上げられないと思

いますが、僕がプレーをしながら持っている仮説を裏づけることはできません。現在、先生や先輩のアドバイスを受け

ながら、研究を進めています。

**青木** 私は学生時代にラグビーを、今は柔道をやっています。スポーツはあ



いまいな表現の事柄が多いのですが、勝つためには明確な理論が必要で、その理論を裏づける定量化も大切です。福谷君がピッチャーとして熱いハートを持つのと同時に、研究者的な冷静な視点を持つていることは、今後のさらなる成長のためには重要なことだと思っています。

**福谷** 体を動かすことだけではなく、義塾で身につけた研究心を持って常に向上を目指すことが、これからの僕の野球人生を支えてくれると思います。またこの研究心は、選手をリタイアした後で指導者として野球に携わる時にも役に立つと思います。もしかしたら、何十年か後に義塾に戻り、投球フォームの画像研究を再開しているかもしれません(笑)。

実学の重視(初編より)

斯る実なき学問は先ず次にし、専ら勤むべきは人間普通日用に近き実学なり。

※ここでは、古文を読んだり、和歌を楽しんだり、詩を作るといったことを指します。

昔ながらの漢学者や国学者が、学問とは古文や和歌を学ぶことであるというのに対し、福澤先生は、楽しみとしてはともかく、それよりも実証科学としての地理学、窮理学(物理学)、歴史学、経済学などの実学(サイヤンス)が重要であると説き、今日につながる学問の基礎を作りました。

学問の生活化(第二編より)

唯文字を読むのみを以て学問とするは、大なる心得違なり。文字は学問をするための道具にて、譬えば家を建るに槌鋸の入用なるが如し。

大工道具を知っていても、家を建てられなければ、大工とはいえません。同様に、ただ文字が読めるだけで、そこに記された内容が理解できないのは、まったく意味を成さない。福澤先生は主張しています。現代なら、外国語が読めることは重要ですが、書かれている内容を自分の勉強や研究に役立てることをしなければ、本当の学問にはならないということです。

## 就職活動と「自分の頭で考える」能力

商学部 教授／就職部長 岡本大輔 おかもと だいすけ

学生の採用において企業が重視する「自分の頭で考える」能力。それは一体どんなもので、高めるにはどんな努力をすればよいのか？就職部長の岡本大輔教授にお話を聞きました。



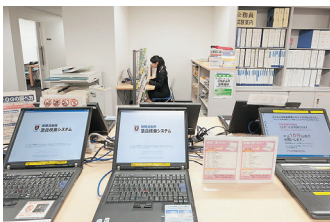
塾生の学力は全国でもトップクラスですが、それはペーパーテストへの対処能力と言えます。テストには必ず答えがあるので、その正解探しを得意としているわけです。逆に言えば、答えのない問題に対処する能力は必ずしも高くありません。世の中に出てから要求されるのは、答えのある問題を解くことよりも、答えのない問題にどう対処するかであり、就職においても当然、重視されます。清家塾長が「自分の頭で考える」というお話をよくされますが、まさにこの問題の重要性を指摘されているのではないのでしょうか。就職活動において最重視される能力は「コミュニケーション能力」と言われますが、実はこれも「自分の頭で考える」ということと密接に関連しています。

他人とうまく話ができることは文字通りのコミュニケーション能力ですが、「企業が学生に求める」という条件をつけた場合、もう少し深い意味になります。単に他人とおしゃべりができるだけではダメで「相手の話をよく聞き、現状や問題点を正しく理解できるか、そして自分の主張も相手に正しく伝えられるか」が重要になります。それには物事に対して自分なりの軸を持ち、自分の頭で考える見方をしなければなりません。そのためには何が必要でしょうか。

私が学生にいつも言っているのは、自分の「専門」を磨いておけ、ということ。なぜならばひとつの専門をしつかりと理解できると、直面する自分の仕事に対して自分なりの軸を持つて理解することができるようになるからです。相手の話を理解するにしても、

そのまま鵜呑みにしたのでは自分の意見は述べられません。必ずしも正解のない問題には「どのような立場で、どのような軸で理解するか」が重要になります。自分の意見を述べるためには、自分の頭で考える拠り所、モノの考え方が必要なのです。それが大学で学ぶ「専門」に他なりません。

慶應義塾は就職に最も強い大学と言われますが、それは単なる小手先の就職指導によるものではなく、答えのない問題を自分の頭で考えさせる、学問研究重視の教育方針によるものと言えましよう。



就職・進路支援担当窓口（三田キャンパス・南校舎地下1階）

各キャンパス就職・進路担当窓口 [URL http://www.gakujii.keio.ac.jp/life/shinro/mado.html](http://www.gakujii.keio.ac.jp/life/shinro/mado.html)

# 学びのコミュニティとしての大学

経済学部 教授／通信教育部長

池田幸弘 いけだ ゆきひろ

「学び」は若者だけの特権ではなく、あらゆる世代に開かれたものです。通信教育部長を務める池田幸弘教授が、本来の「開かれた学びの場」としての大学の在り方を語ってくれました。

大学という場に職を得てから、20年は上が経った。研究者としての自分とは別にして、教育という場で仕事をやる立場から感じていることのひとつが、学校や大学というのは学びの一つの場にすぎないということだ。緒方洪庵の塾や初期の慶應義塾を想起してみると、それは少しだけ先に行った人間が、学びの手助けをするという機関だった。のちに大学令も出され、高等教育機関としての体裁も整っていくが、わたくしたちの組織がそうしたものに端を発していることは忘れないでおきたい。

大学という場に職を得てから、20年は上が経った。研究者としての自分とは別にして、教育という場で仕事をやる立場から感じていることのひとつが、学校や大学というのは学びの一つの場にすぎないということだ。緒方洪庵の塾や初期の慶應義塾を想起してみると、それは少しだけ先に行った人間が、学びの手助けをするという機関だった。のちに大学令も出され、高等教育機関としての体裁も整っていくが、わたくしたちの組織がそうしたものに端を発していることは忘れないでおきたい。

な社会体験がある分、有利な側面もある。もちろん、わたくし自身がそうであるように、年を重ねるにつれて、考え方が硬くなる場合もあるので、そこは自覚的でありたい。

通信教育の学生さんのなかには、学士号をすでに取得されている方が少なくない。かつて学んだ学問分野とは別の分野に挑戦しようというわけだ。しばしば指摘されているように、わが国

学びの衝動は、社会に出る前の十代後半から二十代前半にかけて湧き上がってくるとは限らない。いな、むしろそうでないことのほうが一般的かもしれない。昨年10月から塾の通信教育部のお手伝いをしているが、ここでの学びの主体は社会人である。さまざまな経験を踏まえた塾生が学ぶのは、豊富

の学問のあり方の通弊として、分野間の垣根があまりに高いということがあっている。個々の学問分野を極めるのはいいとして、他の分野に口出しするのは越境とみられ、あまりいい顔はされない。しかし、これでは実際に起きているさまざまな現象の理解に資することはできない。学士入学という形をとるのには実際にはいろいろな条件がないと困難ではあるが、ある学問分野を修めてから他分野に挑戦するというのは、社会に出てからの勉学として一つのあり方を示していると思う。法と経済、アートマネジメントなど、さまざまな具体的問題が複数分野での知見を要求しているのだ。

高等教育機関としての整備ももちろん必要だけれども、学びの場としての大学は常に開かれた存在でありたい。教室があり、先生がいて学生がいて、そして単位の計算は……というのは大学の一つの側面にすぎない。学びの衝動を共有するコミュニティが、大学の原点だろう。

